

校長室だより

第10号

平成29年9月4日



MOTTAINAI (もったいない)



成長する2学期に！！ 一人ひとりとみんなの力で、 いい知恵・いい汗・いい心を育てよう！！

いよいよ、2学期が始まりました。2学期は、運動会を始め、様々な学校行事や各学年での取り組みもあり、子どもたちが大きく成長する時期です。そこで始業式では、次のような話をしました。

○いい知恵

学習の秋、読書の秋です。徐々に涼しくなり、学習しやすい季節です。授業では、自分の考えを積極的に発表し、友達の考えもしっかり聞き、物事を深く考える知恵のある人になろう！

○いい汗

運動会では、練習も含めて、みんなで力を合わせて、力と汗を出して、みんなが感動できる運動会を創ろう！好き嫌いをなくし、給食をしっかり食べよう！

○いい心

毎日の学習、給食、遠足や様々な行事。何一つ、当たり前ことはありません。保護者の皆さんや、先生、いろいろな人の努力や汗のおかげです。感謝して、一生懸命努力できる人になろう！

「月曜日からの学校が楽しみ」、そんな楽しく・力がつく学校をつくるために、毎日の生活で、3つの「あ」と2つの「あ」をコツコツ努力しよう。

- ・あいさつ…自分から
- ・あつまり…チャイムで授業
- ・あとしまつ…下足・教室・机（毎日・毎時間）
- ・あしぺったん…（授業集中）
- ・あんしん・安全…（事故の予防と一人ぼっちのないクラス）



いい知恵・いい汗・いい心を育む2学期になるよう、まずは、長い休み明け、子どもたちの生活リズムを整えるため、ご家庭でも「早寝・朝起き・朝ご飯」の基本的生活習慣の徹底をお願いいたします。

2学期も、家庭と学校が力を合わせて、子どもを守り育てていきましょう！



互いのよさを認め合い、
高め合う集団をつくる

原 晋
教育の扉
「青山学院大学陸上競技部監督」
大卒後、東京・山梨・長野の各県で中学校教員として勤務し、2003年、青山学院大学陸上部監督に就任。2015年、創部97年目にして第1回箱根駅伝で優勝。2017年には第3回箱根駅伝で優勝。

引用の文章含め、
『初等教育資料8』
文部科学省より

青山学院大学陸上競技部監督 原 晋 さん

互いのよさを認め合い、高め合う集団をつくる

毎月発行されている文部科学省『初等教育資料』。誌面の8割方は、カリキュラムのあり方等、お堅い内容が多いのですが、8月号の原監督のインタビュー記事など、広くゆったりと考えることのできる記事もあります。

原監督は、この間、お正月の箱根駅伝で3連覇を果たした青山学院大学陸上部の監督です。以前は、箱根駅伝も遠い目標だったチームを、誠実に精力的に計画的に育て上げて来られました。このインタビュー記事に、陸上部の育成だけにとどまらない、人やチーム・組織を育てる、原監督流のこだわりが載っていましたので、いくつか紹介します。

「できるできないではなく、一生懸命やる」

「目標も自分の思いも達成できなかったけれども、ここまで一生懸命頑張ったというものが自分の中にあれば、それは決して負けではない…」

「心理的安定性を確保する」

「『皆が意見を言うことが良いことなんだ』という雰囲気」の組織にしています。…『学級でこのようなこと言ったら僕は嫌われる』と心配するのではなく、間違いを間違いとして認め合うことが良い…」

「平等感を指導者がつくる」

「箱根駅伝のメンバー選考にあたって、その日だけでなく、一年間、もしくは四年間、平等に彼らを照らすようにしています…」

最後に小学校の先生へのメッセージとして、「…教育というのは世の中に生かされてこそ教育だと思います。だから先生方も常に勉強が必要で、世の中の動向に常にアンテナを張って生きてほしい…日本の人的最大の資産でもある、義務教育の子どもたちを預かっているわけですから、熱く生きてほしい…教員だけでなく、皆で未来ある若者を支えていきましょう…」と。

一校長の夏休み

おじいちゃんの仕事たいへんやったんや

4年ぶりに家族旅行に行った。父が亡くなって以来、体調も思わしくなく、認知症の母を置いて家を空けられなかった。この春、ホームヘルパーの支援を受けても、家での介護に限界と危険を感じ、ケア付き高齢者住宅に入居してもらった。そんな母をおいての旅行で、少し胸の痛む思いもあった。

家族の希望で北海道に行った。それぞれの希望の場所を回った。私は、自分自身が山口県の炭鉱で育ったので、夕張石炭博物館を訪ねたかった。他の観光地が、外国の方も含めて賑わいを呈しているのに、夕張は閑散としていた。

今は閉山となった石炭採掘の現場を再現した坑道を、ヘルメットにキャップランプをつけて、入ることができた。薄暗く狭く足場の悪い坑道を見て回った。娘が「おじいちゃんの仕事たいへんやったんや」とささやいた。その言葉を聞いた時、父の厳しい仕事を支えた母へのねぎらいにもなったかと、少し心が軽くなった。



石炭博物館HPより

息子の弟子になって

一番下の息子はダウン症という障害がある。高卒後、大阪市内の企業の特例子会社で清掃労働者として働いている。当初、職場になかなかなじめなかった時、最後の手立てとして思いついたのが、息子の側で、息子の弟子となって働くことだった。これが息子の自尊感情をくすぐったのか、息子の就労状況が安定した。以後、毎年、息子に弟子入りし、私も清掃労働者として働いている。

朝、7時20分の朝礼。社員さんが来る前にオフィスの掃除機かけ。今回も5時起床で、6時過ぎ出発。トイレの便器の裏側も息子の厳しい指導でタオルで拭いた。



弟子入りする度に、清掃労働者として成長する息子の姿に感心すると共に、トイレ一つも当たり前の物などないと、「感謝」することに気づかせられる。(写真は3年前の12月)